



坂口 安吾 (1906～1955)

### 坂口安吾 (さかぐちあんご)

坂口安吾は、明治39年(1906)に新潟市に生まれました。13人兄妹の12番目の五男でした。父親は、衆議院議員、新潟新聞社社長などを務めていました。

13歳になって県立新潟中学校に入学した安吾の成績表には、「優秀で、特に言語明瞭、作文優秀」「ただし性格粗暴」と書かれていたそうです。しかし、視力が衰えてくると、成績も悪くなり、そのうち学校へ行かず、映画館へ入り浸るようになってしまいました。父親は、学校を中途退学させ、東京の豊山中学校へ編入学させました。そして安吾は、東京で父親と一緒に住むことになりました。

大正12年(1923)に父親が亡くなると、安吾は往原尋常高等小学校に代用教員として就職します。しかし、大正15年(1926)代用教員をやめ、東洋大学印度哲学倫理学科に入学します。そして、友人たちと同人雑誌「言葉」を創刊したり、文学雑誌に投稿したりしていました。

終戦の翌年、昭和21年(1946)に「墮落論」を発表、一躍文壇で脚光を浴び、「白痴」で新文学の旗手と呼ばれるほどになり、原稿依頼が殺到するようになりました。しかし、多忙と睡眠不足から薬を常用することになり、中毒症状が現れるようになってしまいます。

そこで、伊東へ移り住み、静養して筆力を回復させます。そんなころ、伊東競輪で事件が起こります。安吾は、着順の写真に不正があったと主張し、その写真を群馬大学工学部の先生に調べてもらうため、南川潤を頼って桐生を訪れます。皆で酒を酌み交わしているとき「桐生は気に入った。ぜひ越して来たい。」と言って、書上邸を借りることになりました。

これからあとは、「千日往還の碑」に書かれてあるとおりです。

### 坂口安吾 千日往還の碑(さかぐちあんご せんにちおうかんのひ)

坂口安吾(明治39年～昭和30年)は、有名な小説家です。昭和27年(1952)2月から3年弱の期間、書上邸の店裏の一軒家を借りて住んでいました。そのことを記念して、地元有志により「千日往還の碑」が建てられました。

この碑の裏面には、次のようなことが書かれています。

「墮落論」「白痴」で戦後文学の旗手となった坂口安吾は、1952年2月ウルウ日、旧友南川潤の世話でここ書上邸に居を構えた。「夜長姫と耳男」を生み、人の子の親となり、「新日本風土記」を執筆の最中、取材旅行から戻った直後に急逝。55年2月17日早朝、48歳4ヶ月だった。通夜には、小林秀雄、尾崎士郎、石川淳、檀一雄らも駆けつけた。

